

Before the Coffee is Made

コーヒーが入る前に

作詞作曲 マイク・バス



時々まだみんなの目が覚めないうちに起きて、
ランニングシューズをはく。
コーヒーが入る前に。
音を立てないように気をつけて、
静かな冒険のために家を出る。
だいたい特別に行く所はなくて、
ただうねうねしている道をまわる。
しかし、今日は違うことが起こった、
予想していなかった良いこと。
そして今、何も言えないでいる。
まるで冬の夜のそよ風のように。
ジョギングをして、
ジーンズでバスケットボールをしている生徒を通り
こしていくうちに、
青々とした緑の木に囲まれた
ガラスパネルの家を見つけた。
尊敬の念をいだいたのは、その家にではなくて、
その中で料理をしていた人にでもなくて、
その向こうにあったクリスタルブルーの湖と
そこに反射している太陽の光線。
「この機会を見逃さないで、
きっとこれは何かのサインだ。」と僕は思った。
だから急いで庭を通過して、
そして湖畔まで走っていった。

さあ、湖を見て、と自分に言ってみた。
夏に、何ときらきら光っていることか。
日の出を見つめているけど、
今まで以上に美しい。
泳ぎに行きたい、飛び込みたい、
自由になりたい、という衝動にかられる。
水中を歩いていると、僕の足下で
魚が踊る。
彼らは、僕の動きを読んでいて、
そして、僕の行く道に合わせてくれる。
彼らは何を考えているかな？
何よりもそれが知りたい。

テレビ番組かドキュメンタリーに出ているよう
な感じがして、
それかグリーティングカードの中にいて、
完璧な景色の絵の中にいるような気がする。

あっという間に、正午がすぎて、
もうさようならしなければならなかった。
夕食を作るは僕の番だったし、
しかも書くことはたくさんある。
でもベッドに横たわっていても、
何も浮かんでこない。
紙は雪のように真っ白で、
頭の中は時間のようにはからっぽだ。
「これは完璧な話じゃないの？
大人を泣かせるぐらい？」と僕は言う。
「もしもし？こちらは君の詩的な思考ですが。」と。
そしてついに、夜通し窓の外を
じっと見つめながら、
素晴らしく陽気な鹿が目にとまって、
何を書けばよいのか、よく分かった。